
とある侍の一方通行～江戸編～

スペディオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある侍の一方通行（江戸編）

【Zコード】

Z9870W

【作者名】

スペディオ

【あらすじ】

銀時が学園都市最強の一方通行になつてから十数年、異世界「とある魔術の禁書目録」

でまた新たな大切なものを見つけだし、過ごしている。

そんなある日、学園都市から銀時、麦野、垣根の姿が突然と消えた。

消えた場所は……

「超能力」と「侍」が交差するとき、物語は始まる。

この銀時はチヨーカーがついてません

あと一方通行要素が強くなっている予定です

1、悪党は悪党でも正直は違つ（前書き）

我慢ならず書いてしまいました。

更新は

『とある町の一方通行』と『晩説』よつ連一二です。

1、悪党は悪党でも性質は違つ

茶髪でホスト風を感じさせれる少年はふと田を覚ます。

その風景に違和感を感じたのは真っ先に見えた夜空に浮かぶ満月が
見えた。

それで漸く覚醒した。

それに一人じゃないことに気づいた。

ガチャリと一丁拳銃をこちらに向けた妙な服を着た金髪の女がいた。
自分を囲むかのように着物を着た連中が集まり、刀に手をかけてい
る。

「貴様、何者つスか！？」

銃を向けたまま女は警戒している。

「はあ？」

寝ていたのか、上体を起こして意味不明な状況に困惑する。

それに

「舟が空を飛んでるだと……？」

おかしな光景にますます理解ができない。

(「じじじじじなんだよ？学園都市じゃ……ねえな。」)んな連中見たことねえし)

まずは聞くべしとした。

「ジジジなんだよ？テメーらは一体何なんだ」

単純に聞いただけなのだが、聞く耳は持たないらしい。

「ジジの馬の骨かもわからない奴に教える筋合にはないっス……」

話して貰える様子はないのに呆れた顔する。

「つたくよ……何がなんだかさっぱりだよ畜生。じつじつてんだよ」

げんなりとしてこると更に誰かがやつてくれる。
そして興味深々に少年を見る。

「ほお……妙な服装はしているが、我々と回じ血の臭いがするな」

サングラスにツンツンした髪をして背中に二味線をした男は少年を見てはつきりと言った。

少年は驚かない。

この男からもそして周りにいる連中も同じ臭いがしたからだ。

「フン……んなもん、その手で何度も見てきたよ」

フツと鼻で笑う。

「江戸は、江戸。我々は鬼兵隊とこり、言わば世界に喧嘩を売った反乱分子つてひとでござりぬか」

男が急に場所と、自分達の素性を軽く話したのに眉を寄せた。

（江戸だあ？………… オイオイそれにしてもそんな時代に空飛ぶ舟とか開発できるような愉快なとこじやねーだろ。まさか、異世界つて馬鹿げたとこに着たのか俺は）

（歴史とは掛け離れた別の世界によ）

少年にとつて江戸時代なんてのはもう200年以上も前の話しだ。それにこんな開発的な時代じゃなかつたことも知つてゐる。それとは別の世界。もう一つの江戸が存在することになる。

「平行世界なんてどこの漫画なんだよ…………」

ボソリと呟く。

しかし、歴史と一つ同じものがあつた。

「お前らはもしかして『侍』って奴なのか？」

「そうだ」

男が答えると、すべつと立ち上がる。

連中は警戒したままギロリと睨んでゐる。

「わかつた所で別に何もしねえよ」

めんどくさそうな顔で見渡して頭をかく。

「貴様の素性を語しても、らぬつか」

男はやはり聞いてきた。自分が何者なにかを。

「俺はただのよそ者さ。…… じつは、うちらとは別の世界から来た」

直に言い過ぎたかと思つたが、信じてもらえる策はある。今のところ全員馬鹿にしたような顔している。

少年はそのまま話しを続ける。

「そんな顔をするのは当然だな……『超能力』って知ってるか？」

「たとえば」

背中に白い6枚の翼が出現した。

簡単に言えば、普通の人間が持たない異能の力

サングラスの男と金髪の女以外に少年を見た連中は驚愕し、混乱して刀を抜こうとしていたが

ゴッ！！

「！？」

全く動けなく、刀を抜く動作で止まった。

「……何をしたんスか？」

動けない体で、ギロリと鋭い目で睨みつける金髪の女。
「てめえらの動作を逆算して俺の能力、この世に存在しない素粒子
を造りだしてそれを重力として動きを止めただけだ」

どう言つ原理かを説明して少年はニヤリと笑つ。

「これでわかつてくれたか？」

「……あまんと天人ではないのか」

「その天人つていうのが何だか知らねえが、俺は人間だ」

男が何を言つているのかわからないがとりあえず否定した。

「つまりあれだ」

「これが俺に身についてる超能力『ダーカマタ未元物質』。異物の混じつた空
間、ここはてめえらの知る場所じゃねえってことだよ」

そう言つてやると白い翼を生やしたまま、彼らの動きを解除してや
る。襲撃はこない様子。

あとはここには用はないと思い、飛ぼうとしていたがまた別の男が

現れた。

黒い髪に片目。派手な着物。キセルをくわえながらやつてくれる。この男は他の連中とは違う危険な匂いを感じた。

「なかなかおもしれえもん見れたなあ」

身長はそれほど高くないがとても闇を深く感じさせる男。少年は一発でわかつた。

「お前が親玉か」

「ククツ。まあそんなもんだ」

不気味に笑っている異様な雰囲気をだす片目の男はまさに闇そのもの。

「ここにそんな力持つてる人間なんざいねえ。それに天人にもそんな奴はいねえだろうよ」

「おっ、信じてくれんのか?」

「ああいいぜ。それに氣に入った」

少年は理解ある男に喜んだが、次の言葉で不機嫌になつた。

「俺と組んでこの腐つた世界をぶつ壊さねえか?」

録にこの世界を知らない人間に勧誘してきたのだ。

「ああん? 何でそんなことしなきゃいけねんだよ」

眉間にしわ寄せで、睨む。

「てめえが俺と同じ匂いがするからよ。闇に潜んで血を浴びる獣によ」

クククと笑うその姿は邪氣と同じで、しかも何気に当たつてこる。

ただ違うのはこの男との違いはある。

「まつ確かに俺は闇に潜んだ悪党だ。だが、お前とは違う。別に破壊を楽しむほど狂っちゃあいねえ。俺は守るべきものを守るために悪党になつた。ただ、それだけだ」

守るものがあるかどうか田の前の人間を見てはつきりとわかる。

「たしかに、違うな。俺に守るもんなんてありやしねえ。俺の獣の呻きが止まる時は、すべてぶつ壊れた後だ」

守るためになつた悪党とすべて壊すためになつた悪党。

二人の悪党の性質はまつたくもつて逆だつた。

「それにしても俺が来たつてことは、あいつらも來てる可能性が高いいし、いつまでもここで喋つてる暇はねえ」

今度こそじやあなど言つて飛び去つていぐ。

それを見て男は

「ククク、クハハハハ！ 楽しくなりそうだなあ。あいつまで死んで丁度退屈してたところだったんだよ」

「超能力……か」

「また派手な祭が起きそうだ……まつあの世で見ろよ江戸が血に染まる瞬間をよお。なあ」

「

夜空を眺めていつまでも笑う姿は部下でもゾクッと伝えるものがあった。

キセルを吹いて部屋に戻つていつてもシンシン頭と金髪の女ですか
一步もその場が動けなかつた。

1、悪党は悪党でも本質は違つ（後書き）

垣根と鬼兵隊の場面でした。

ついでに、編みつけられました。

2、田が覚めたり懐かしこ祭風氣なのは誰だつてひづつかる（詠書わ）

りゆつと更新

2、目が覚めたら懐かしい雰囲気なのは誰だつてびつべつする

黒い独特のラインが入ったTシャツにジーパンを入った身長が結構高い白髪の少年は戸惑っていた。

目の前にはもう会えないとばかりに思つてはいた一人の人物が不審そうに自分を見てくる。

（田を覚ましたらここは前にいた万事屋でしたとかつて冗談とか程にもあンだろオガアアアア！！！）

ダラダラと冷や汗をかいて心中叫んだ。

（それにしてもあれだな。いつやは十年以上たつたつつかのに何も変わらねエンだな）

冷や汗を搔きながらもそんなことを思つてはいるトチャイナ服着た少女が傘をコチラに向けた。

「お前誰ネ？」

（神楽……）

敵意剥き出しで睨むその姿は銀時にとって悲しいが、今は一方通行なのだ。

「……つ、俺だつて何が何だか知らねエよ。気付いたらここにいたし、テメエら変な格好してるし」

敢えて「」まかした。「」こで銀時だつてカミングアウトしたつて二人を困惑させるだけだ。

「まあ、オマエ呼ばわりはさすがに気分ワリイからよ、一方通行アキセラレータで呼ンでくれや。それが俺の名前だ」

このままじや拉致が開かないため、能力名を名乗る。神楽はまだ警戒しているがもう一人はそれを見ながら苦笑していた。

「そうですか。僕は志村新ハと言います」

新ハと名乗つた少年は銀時が持つっていた木刀を腰にかけていた。

「……神楽ネ」

それに続いて警戒しながらしぶしぶ名乗ると銀時は

「そんな警戒したつてなンもしねエよ」

一瞬悲しそう顔をしたがすぐに元に戻し、呆れたように答える。

（それでも、何でまたここにいるんだよ？何のその前フリもな
くよ）

銀時は考えていた。何故急にこの時代に戻ってきた事を。

（今回、仙人は出て来なかつたが……）

（これを知つてンのは木原ぐらいしか……）

「ひい」で何かに気付いた。何故木原が知っているのかも。

(あいつは上に関わりがある見てエだから)

「…………まさかね」

上の連中でコレを知っているのは大体、限られているし銀時が想像したのは一人。

眉を潜めて顔を歪ませている

「あ、あの? アクセラレータさん? どうかしたんですか?」

新ハがよそよそしく声をかけてきた。

「あア?」

考えていた最中だったため顔はそのままで新ハに向けた。「ひいっ!」と小さな悲鳴を上げて怯えてしまった。今の銀時の顔はただでさえ悪党面なのだから無理もない。

「何でもね? ……わりイな。考え方してたもンで」

一言詫びてスクッと立ち上がりっこから出ようとする。

「待つネ!」

神楽が銀時を呼び止める。

「お前から……銀ちゃんと同じ匂いがするのは何でアルか?」

そこで体が一步も動けない錯覚に落ちた。

新八は「え？」と混乱している様子。

神楽は本能で感じているのだろう。まだ銀時の背中に傘を向けているが、銀時は振り向かない。むしろ、今重たい足で玄関に向かおうとしている。

「答えるヨー！何も関係ないなら答えるアル！…！」

今にも泣きそうな神楽の叫びに銀時は今にでも抱きしめたい衝動に陥り始めていた。

そうなつてしまつてはもつ駄目だつた。振り向いて抱きしめようとする矢先だつた。

何やうり外が騒がしいのに気づくと、氣を紛らわすために急いで外に出る。

一人もそれを見て慌てて追つていぐ。

見たのはパトカーが人間に追いつけないといつ面白い光景。

銀時は驚愕していた。

聞き覚えのある怒鳴はい。問題は追われている女性。こいじゅ出会つ事がない姿があつたからだ。

「だあかあらああああ…テロリストでも何でもないつつてんで
しうがああああああ…！」

女性はこちらに気付いてなく逃げるのに必死だった。

銀時はどうやって彼女が逃げているのかを知っている。

卷之三

麦野と呼ばれた少女はそれに反応してそちらに向かってぱたっと停止して

「銀時いいいいいい！」

そう叫びながら飛び込んできた。

「待て待て待て！！原子纏いながら飛び込んでくんなアアアアアア！」

演算する暇もなく麦野が銀時にそのまま体当たりして地面に倒れた。

「銀時！」「うーん、なのよー？ わけわかんないしー！ 垣根はつー？ ！
？ いーないのー？ ！」

銀時の上で暴れる麦野に対して銀時は顔をしかめる。

「 いてエし、重たいンだから降りろや！－！お前太つ」

どうやら余計なことまでいつたらしい。麦野の右手によつて地面に

減り込んだ。

「汚物は排除つてね」

立ち上がりつてパンパンと服を払うと銀時の近くいた二人が麦野に近づいてきた。

「この人の事の名前つてアクセラレータさんじやないんですか？」

絶賛氣絶中の銀時を指しながら新ハは聞く。

「ん？ それは能力名よ。超能力知らないの？」

「超能力……？」

新ハが首をかしげて神楽は怪訝そうな顔している。

「まあいいや。こいつの本名は坂田銀時だよ。何で能力名を名乗つたかは知らないけど」

麦野がそう言つた瞬間、パトカーから出てきた隊員やその二人は固まつた。信じられない顔している。

そもそも銀時なんて珍しい名前はいないだろ？

麦野は

「あれ？ なんでそんな顔してんの？ こいつを知つてたり？」

キヨトンとしている。

そうしていふうちにパトカーから更に三人が出てくる。

「“じうこ”とか説明してくれないか？」

先程の会話が聞こえてきたのか尋ねてきた。

尋ねてきたのは『ゴリラ』顔の男。

「は？」

頭に？をつけた麦野はわからなかつた。

「そつからは俺が説明してやらア」

いつの間にか起きたのか地面に座つている銀時。

「久しぶり。てかこの顔じやア、初めましてだな。『ゴリラ』、大串く
ン、総一郎くン」

「『J.R.』では『万事屋銀ちゃん』なンて自営業やつてましたがア」

「今は学園都市第一位やつてゐる『一方通行』こと坂田銀時でエす。
よろしくな」

ニヤリと意地悪い顔して銀時は顔馴染みのある三人に挨拶をした。

2、目が覚めたら懐かしい雰囲気なのは誰だつてびっくりする（後書き）

これで超能力三人登場しましたね。

次はちょっと科学サイドから始まります。

3、あたりに信頼するのはお人よしすぎるもんだ（前書き）

科学サイドからです。

3、あつたり信用するのはお人よしすぎるもんだ

（科学サイド）

学園都市伝説となつてゐる不気味にそびえ立つ窓のないビルに巨大な培養機の中に逆さまに入つてゐるのがいた。

アレイスター＝クロウリー。

学園都市の統括理事長である彼とも彼女とも呼べない実体はモニターを見て鮮やかに笑つてゐる。

映つてゐるのは慌ただしく動く同じ理事会の連中と、リーダーの失つた組織の行動。

そして全学区に流れ出しているニュース。

『第一位、二位、四位の消失』

これに對して彼らに関わつてゐた、光の連中も戸惑いを隠せていな
い。

主に幻想殺しや超電磁砲、それに学園都市に残つてゐる妹達は搜索
に専念してゐる。

そこで邪魔が入る。

「アレイスターああああー……どうこうことだ」「いやあー？」

金髪に白衣、顔面に青刺の男が怒鳴りながら入ってくる。

彼にもその映っているモニターが見えている。

「あいつらに何かしたとなればオメーブれえしかいないだろ？」「…自ら学園都市の要を手放して何がしたいんだ！？」

今にも殺したくなる衝動を押さえ、睨むだけで我慢する。

「まあ少しばかり落ち着いたらどうだ木原数多。これはちょっとしたゲームだよ」

「ゲーム…だと？」

金髪の男、木原数多は田の前にいる理事長の言葉に更に不信感を表す。

「坂田銀時。彼の素性は知っている君ならば、ここまで言えば私が何かしたのは言つまでもないだろ？それに学園都市はそれほど脆くはない」

そこで嫌でも理解せざるを負えない。

木原にとつてはこれほど嫌なものはなかつた。

「テメー……そのためにあの二人まで飛ばしたのか…？」

「フフフ……いずれは必ずばれる。ならば、早いほうがいいだろ？それに私のプランに支障はでない」

「あくまで私のプランは坂田銀時によって成立するものなのだから

「ヤソと笑う姿はじまでも輝ましいものだった。

木原は拳を握りしめてアレイスターを見て狂つてるとしか思えなかつた。

「どこまでもぶつ飛んでやがんなアレイスター！ テメエが憎くて仕方ねえ」

歯をギリギリ噛み締めながら木原は苦しまざれに話す。

「問題ない。リスクは大きいが問題ないのだよ。代わりと言つてはなんだが、用意してあるからね。彼らと対等、もしくはそれ以上のものを」

「何…？」

そこで新たに場面が変わる。

「な、なんだよ……こりやあ……ー？」

木原は驚愕よりも恐怖が見えた。

それをみてこれ以上言葉を発することはできなかつた。

彼が見たものは……

～江戸サイド～

場所は変わつて武装警察”真撰組”屯所。

一つの広い部屋。彼らが会議に使つてゐる場所に近藤、土方、沖田を始めとする隊員達が座つてゐる。

そして神楽に新八、この時代とは場違ひな服装をしてゐる銀時、麦野がいた。

銀時の隣に座つてゐる麦野は彼を見て違和感を感じた。

(あれ?)

感じたのは銀時の首筋にあるものべきものがない。

「銀時。あんた何でチョーカー失くなつてんの?」

「あア?……そオ言えばねエな。普通に動けるし、能力は……今使つたらまじイよな」

「そんな状況じゃないしね

チョーカー。あの世界では脳に障害を受けて、妹達によるハサカネットワークでの援助がなれば能力は疎か、話すことも動くこともできない。

それがなくとも普通に動けたり話せたりするのだ。銀時も今漸く気づいた。

ちなみに一人は周りに聞こえないよう小さな声で話している。

「おい」

鋭い声が一人の耳に入った。

「聞かせてもらおうか。何でお前が万事屋を知ってるのか、お前がその名前を名乗っているのか全部な」

土方は鋭い目線で冷たく言い放つ。

「そうね、あんた隠し事いくつか私や垣根にしてるでしょっ。今こで話してもらおうかにゃーん？」

隣の麦野からも目線が痛いほど感じる。

「そのつもつなんですウ。そんなピコピリすンなよ~」

銀時はため息を一つ。それから怠そうな目で周りを見た。

そして

「お前らが知ってる坂田銀時が突然死んだのはわかってるよな？」

「！？」

確信から話すと全員は頷く。ただ一人麦野は驚愕している。

まつ当然の反応だと銀時は予想はついていたため落ち着いている。

「何のために俺を選んだのか知らねエが、どつかのクソ野郎（仙人）がその魂を別世界の人間」

自分で指を指してから

「信じられねエ話しだろオが、このアクセラレーターつて奴に憑依して訳だ」

この体に憑依したことを告げる。

全員が押し黙る。まるで夢物語でも聞かされていいるようなものだ。

別世界、憑依。現実的に有り得る事ではない。

「せつかくだからテメエらにも隠してたことを今ここで、バラしてやらア」

沈黙の中、銀時がまた話し出すと目線を向けてきた。

「攘夷戦争……俺は桂と高杉とともに最前線で戦っていた」

それを聞いた近藤、土方、沖田含め隊員達は固まつた。

神楽、新八は知ってるため黙つたまま見つめているが麦野は

「攘夷……戦争……？」

初めて聞く言葉に動搖している。

「天人から国を護るために取つた刀が今じゃ、そいつに支配されて、戦つた俺達はテロリストだと反乱分子ときた」

「それでもこのクソシタレた世界で俺達は生きてきたンだよ」

「上に言われて動くお前らとは違うンだよ。正直、戦争を知らねテメエらが攘夷志士をしょっぴにエンのが腹わた煮え返るほどムカついて仕方がねエ」

これほどまで銀時が怒りを表してゐるのを初めてみた。
真撰組も神楽、新八、麦野は銀時の冷静に話す姿からその怒りを感じさせられた。

「まあ丁度いいや。攘夷戦争後半……耳にした事あンだろ?『白夜叉』つてな」

それにピクッと一瞬早く反応したのは以外にも隣にいた麦野だった
が何も言わない。銀時の口から明かされるのを待つてゐる。

「…………こんなことを書いてあつた資料があつた」

近藤が重々しく口を開く。

「敵からも味方からも恐れられた伝説の武神」

それだけだと言つ近藤に銀時は横に首を振る。

「それだけじゃねエな。いつかてた奴のほつが多い。銀色の髪に
血を浴び、戦場を駆ける姿は、まさしく夜叉つてな」

「ずっとテメエらの近くに敵である白夜叉がいたンだよ。ずっと一

緒にな

こんなもんだな、そういうた感じで銀時は一息入れる。

「これが俺……いや、お前らといた坂田銀時だ。わかつてくれたか？」

話し終えた銀時は静かに見つめる。

「じゃあ……」

沖田が苦し紛れに声を上げる。

「旦那は……ずっと騙していたって事なんですかい？」

沖田の目が銀時をとらえる。

「……そオナンのかもしれねエな。けどよ、何でかな。テメエらなりに護るつとすンのを見てつとビオでも良くなつてたンだよ」

フツと笑つて答える。

「お前らといると桂や高杉ら仲間を思い出すんだよ。馬鹿みてエにハシャいで、馬鹿みてエに真っ直ぐなとこがよ…………つい手を貸しちまう。だからテメエらを殺そつとは思えなかつた」

素直に思つていたことを打ち明けた銀時は優しく笑つてゐる。

「信じるかどうかはお前ら次第さ。今思えば英雄なンて称えられるほどのモンじゃねエ。言つてみれば、今も昔も変わらねエ殺人鬼とした悪党だ」

「そんなん悪党が消えた。そんだけのことだ」

今となつては過去の話だ。この世界の自分はもういない。だからと言つて『一方通行』となつて生まれ変わった自分がここで深く関わる必要はない。

しかし、それを許さない人間もいる。

「信用するぞ」

その言葉に驚いて銀時は近藤を見る。
それだけじゃない全員が一斉に銀時を見つめている。

「お前が敵で白夜叉だつたとしても、俺達を幾度も助けてくれた。何度もこの町を救つてきたじゃないか。それだけで十分、信用できる」

「借りは返してねえし気に入らなかつたが感謝してんだよ」

「旦那……今のあんたは高杉より悪党面してますけど旦那は旦那。見た目は違えど宿している魂は変わつてないはずですぜい」

士方、沖田も続くと隊士達も納得する。

銀時は堪えられなかつたのか目線を下に落とす。

「お氣楽連中だなア……つたぐ、二ト共のくせによ

誰にも聞こえなつよつて呟くが麦野には聞こえていた。

「訳わからん時代に飛ばされてこんな話聞かされるとはねえ。でもあんたがここにいたことも、その体に取り付いてんのは認めざる負えないでしょ。それにあんたさあ、こんなに慕われてんなら少しは素直になつたらどうなの」

その性格じゃあ無理そうだけど麦野が茶化すと、うひむせと返す。

顔を上げて照れたように

「まあ……なンだ…感謝するぜ」

頭を搔いた。

すると神楽がスクッと立ち上がった。

「本当に銀ちゃんのはわかったネ……だから今の銀ちゃんの実力で私と勝負するアル！…！」

ガチャと傘を向けて挑発する。

「オイオイ……こには穏やかで終わるもンだろ？」

銀時は少し引きながら呟く。

しかし、新八の

「逃げるんですか？銀さん？」

一言でガラリと雰囲気が変わった。

長年いた麦野は

「あらりりりりりあ、あの子びつなつても知らなによ
苦笑していた。

「逃げる？……ククッ馬鹿言つてんじやねエよ。喧嘩売つたのはそ
つちだ。どなつても知らねエぞ、神楽」

さつきとは違い、テンション上がり氣味に笑う。

「望むとこネ！銀ちゃんとは本氣で戦つてみたいと思つてたアル！」

神楽もニヤリと笑う。

それを見てまたテンショングンが上がつた。
「キコキと首を鳴らして立ち上がる。

「新八君、木刀借りるぜ？」

「はい」

新八から木刀を受け取ると

「久しぶりに最つ高に楽しくなりそオだなア」

銀時もまたニヤリと笑つて返した。

3、あつたり信用するのはお人よしすぎるもんだ（後書き）

もう一つの『とある侍』とは銀時の性格が変わってるのをこのと
こは、了承を。

4、喧嘩を売るのは程々に（前書き）

銀時 VS 神楽です

4、喧嘩を売るのは程々に

場所は真撰組屯所の外。

意外と広い庭には神楽と銀時。

そして麦野から言われて少し離れて見る新ハと真撰組一同。

「あの、何でそんなに離れるんですか？」

新ハは素朴な疑問を麦野にぶつけた。他も同じ様子である。

「ああ、あいつテンション上がる何するかわかんないから。それに能力使つと思つ」

何の変哲もなく麦野は答える。長年の付き合いが淡々としている。

「本当に何なんですかそれ？」

「まあ見てればわかるさ。どうこうもんか」

麦野はこれから始まる戦いに目をやつたまま答える。
その先にはお互い睨み合つ一人の姿。

「さて、そろそろ始めよオジヤねエか、神楽ア？」

「ヒーヒーいつでもOKアル！－」

「そオかい。ンジヤ」

トン、と足に力を入れて踏み込むとビュンと一瞬にして神楽の目の前に飛び込んだ。

「愉快に素敵なスクラップにならねよおに氣イつけよお！…！」

ブン、と迅速に木刀を振り下ろす銀時に神楽はとっさに傘を盾に防ぐ。

神楽は銀時のあまりの速さに飛び引く暇が無かつたのだ。

力を最大限にして振り払おうとするが、それができない。逆にドンドン押し込まれていく。

「くつ！」

ギリギリと音を立てて軋む傘と木刀。

「オーオー、どォしたア？ 神楽ちゃん？ 天人でも最強に入る種族であるお前がこんな人間様に押し負けてンゼ？」

ニヤリと笑つて余裕を示す銀時は挑発する。

「う、るさいネ！…」

更にグツと力を入れるが、

「…？！？」

現状は変わらなかつた。むしろ力を入れると同時に押し込まれていくのだ。

「わからねエよな？だが、俺は神楽が力を入れてるのはヒシヒシと伝わってくるぜ」

クククと悪党のように笑う。

「一ツ、教えてやる」

まるで悪戯でも成功したかのように話す。

「単純に考えれば、それ以上の力で俺はお前を押し込んでると思うだろオナ」

「そオジヤねエンだよ。お前やあいつらはそオ思つが違うンだよ。俺はただお前の力の向き（ベクトル）をお前自身に返してンのと更に俺が力をそっちに向けるだけさ。まあ 反射つてわけだ。だからなんぼ力を入れよオとも疲れるだけだゼ？だから」

神楽は銀時が言つてゐることが理解できない。普通の人間はできるはずがない。むしろ、夜鬼族や他の種族でもできるもんでもない。しかし、混乱している暇はない。グッと力を入れ込まれたのだ。耐えれるかわからないほどに。

そして

「ふつ飛べ、リカ」

振り抜かれて神楽の身体は凄まじい勢いで吹つ飛び、壁に激突した。

「まつお前の力を反射してンのに簡単に吹き飛ばせねエのは、さす

が夜鬼つてどこか？」

ふウ、と一息入れて崩れ落ちた壁のほうを見る。

するとガラツと音を立てると

ダダダダダダダダッ！と傘から放たれた銃弾は銀時に向かっていったが、ニヤリと笑つて何も構えない。

神楽はそれを見て驚く。

「早く避けるアル！？」

予想外の展開に動搖するが、すでに放つたものは銀時に当たつていた。

その瞬間だった。

「なつ……！？」

その当たった銃弾がそのまま神楽のもとへ返つていった。突然のことに反応できないため肩や足にかすり傷程度に当たった。

「あれじゃわからねエだろオから反射つてもンを教えてやつたぜ。まア少しの傷程度で納まるように操作してやつたけど」

そのまま返して当たつたらお前でもきつかったらオな。とニヤニヤと憎たらしい顔をしている。

「俺の能力はベクトル操作つつつてな。大気や熱量、おまけに人の

血液の流れだつてできる。まああらゆる殆どの向きを自在に操作することができる

「こりで少しネタばらしをして、あちらの状況も話し出す。

「俺が今いんのは学園都市つつてな。超能力の開発や科学が発展しているこことだ。それに殆どが学生で占めている。それを餌に研究員どもはその超能力を植え付けさせようとしてるわけだ。誰もが持てる超能力があるとは限らねエ。超能力にもレベルがある。0～5、つまり得られなかつた無能力者（レベル0）だつてワンさかいるし、自力で頑張つて地道にレベル上げてる能力者だつている」

「俺は研究員どもにいじられた結果、最初からレベルMAXである超能力者（レベル5）になつていた」

「麦野…それに垣根つて奴も同じだ」

周りに聞こえるように銀時は話し掛ける。先程の戦闘から固まるばかりだつた。

麦野は銀時を見つめて黙つている。

そこでハツとして銀時は今の状況に戻る。

「おつと余計なこままでドンドン言つちまいそオだつたぜ」

「危ねエ、危ねエと呟きながら神楽を見る。

「あア、反射つつつても絶対的な防御性だつてわけじゃねエ」

反射を貫ける二人を思い出して笑みをこぼす。

「例えば、俺の設定してある反射膜に入る直前に拳を引き戻すことができ。そんな荒業ができればダメージが『元の』ことができる」

「出来る奴なンてのはそオそオいねエけどな」

そう言つたあとまた足を踏み込むと今度はピキピキと地割れのよう地面が割れ、その断片が神楽へと襲いかかる。

神楽は動かない。目を閉じて集中しているようにも見える。

断片が田の前にきた時にようやく開けると一瞬で振り払うと負けじと速い速さで銀時に迫ると

「わかつたネ」

そう呟くと拳を顔面に打ち込んだ。

「ふつー!？」

バキッといい音がして銀時が吹っ飛んだ。

「ベラベラと喋りすぎたアルな。私は腐つても夜兎ネ。戦闘に関しては頭のめり込みが早いのは銀ちゃんにはわかつたはず田」

戦闘に関しては嫌でもズバ抜けている神楽はその情報が必要だと思えば取り入るし、身体能力だつて銀時には負けてはいない。それをいかしたら彼が言つていた反射を貫くことができたのだ。

「ククッ……あははははははははは、ぎやははははは、くきやき

やきやあや ! ! ! そオだよなア ? そオじゃねHと面白みが
足りねH

スクツと立ち上がった銀時はおかしそうに笑った後、満足した顔を
している。

「どオやら俺はお前を完封なきまで叩き潰さなきゃ済まないら
しイ」

「私も同じネ。それ以外ないアル」

お互にニヤリと笑つて傘と木刀を持ち直す。

「第一ラウンド開始つてなア !

銀時が叫んだのを同時に突つ込む。

これは誰が見ても普通の力の見せ合いでなく、戦場での殺し合い
に見えた。

4、宣傳を売るのは程々に（後書き）

もうひょこ続ります。

てかこれもう銀時じやねエ

5、暴れたないうけはあひとこいつ（前書き）

続きを読む

垣根ぐんの登場です

5、暴れたなら片付けはきちんとじよ。

垣根は歌舞伎町で歩き回っていた。

一つ思ったことは

(まじで何でもありな世界になつてんな)

空飛ぶ船や様々な宇宙船などが空を少しばかり覆つてゐるし、畏敬な形をした人間とは言えない物体が一足歩行でうじやうじやいるファンタジーな世界だと垣根は思った。

あまりにも非現実的な光景に笑つてしまつていた。

(あれが天人ねえ……)

情報が集めた結果わかつたのは

(約二十年前の天人の襲撃、攘夷戦争……不条理な条約での天人の勝利と侍の衰退、今じゃ国のために戦つた攘夷志士の処分……か)あまりにいかれた街だということだ。

「どにも上の連中つてのはへタレな馬鹿野郎しかいねえのかねえ」

垣根はくだらなそうに歌舞伎町を見渡した。

「まずは銀時達探さねえとな」

根拠はねえんだけど、と思いながらだるそうに歩いてくると

「貴様、今……銀時と言わなかつたか？」

「あん？」

誰かに声をかけられて振り向くとそこには笠を深く被つたお坊さんのような人物がいた。

「誰だ？ テメエ？ 何で銀時を知つてやがる？」

垣根が怪訝な顔でその人物を見つめる。

「そんなことはいい。銀時とは……坂田銀時のことだりつ……アヤツは死んだんだ」

悲しみの満ちた声で発する男に垣根は驚愕した。

「……は？ 何言つてんだお前？」

わけがわからなかつた。何でここで銀時が出てくるのか、死んだなどと出でくるのか。

「ならば、着いてくるとい。奴がいた居場所に。そこでハッキリするだらう」

そう言つて男は歩きだす。垣根は内心、困惑しながらも着いていくことにした。

「へそつたれ、何なんだよ一体？ 銀時……テメエは何者なんだよ……」

そして思わず、今までずっと家族として過ごしたあの白髪の少年に悪態をついた。

「やめはつ！ ホラア！！ 物足りねエぞ神楽ア！？ 酸昆布切れになつちまつたかア！？」

「うつやいネ！！ お前こそ銀ちゃんなら、糖分切れでんじやないアルか！–この糖尿病寸前マダオガ！！」

「残念でしたア！ ちなみに今の銀さんはブラックコーヒーも飲める両刀使いなんですウ。それに俺の能力にかかればそんなん気にすることないんですウ！」

「だつたら一生それに埋もれてろヨ、クソチート野郎が！！」

「説明一つで俺をぶン殴れるお前も十分、チートだと思つンですがねエ！–！」

爆発音、破壊音が聞こえるなど激しい戦闘の中でもたくもつて関係のない会話が聞こえてくる。

荒れた真撰組頓所を見ても、近藤達は止めることもできずにあんぐりと口を開けたまま悲惨な状況を見つめている。もし止めに入れば死ぬといつ言葉がでないスケールを越えた戦いになつていてるのが誰でもわかる。

「へえ～あの子やるじやん？ 銀時の聞こえてたんだけ天人つての

は見かけに寄らず、す」このね

麦野が神楽の戦闘を見てて褒めている。

だが麦野は知っている神楽は余裕がないのに対して銀時は俄然余裕を持つていることを。

「例え銀時に攻撃できても攻略にはならない。あいつは私よりもいくつもの戦闘パターンを把握して頭の中で想像して組み立てるのが尋常じやないくらいできる。そのくらい頭の回転は速い」

「あの子は銀時に勝てない。絶対に」

するとまた一つ、ドオオオーン！…と騒音が響く。

その騒音に田を向けると部屋に吹っ飛んだ先に倒れている神楽と、ニヤニヤと笑つて見つめる銀時がいた。ここまで差があるのかと誰もが騒然としている。

銀時と言つ男は前も掴みどころがなく、強い魂を持ち、誰よりも強かつた。

ただでさえ届きそうになかったのにまた遠く感じじるようになり銀時を知つてゐる全員は恐怖を覚えた。

ただでさえ届きそうになかったのにまた遠く感じじるようになり銀時を知つてゐる全員は恐怖を覚えた。

その事を知らない銀時は倒れている神楽に声をかける。

「神楽よオ、いぐら俺に攻撃出来たとしてもよ……ワンパターンでやろオつて考えはねエだろ」

呆れたようにゆつくりと立ち上がる神楽を見つめる。
「もし、本気でそオ思つてんなら、抱きしめたくなるくらい哀れだな」

ハアとため息を吐き出すと一瞬で背中に竜巻のような翼を生やして神楽の元へ突っ込み右の拳を向ける。

神楽はいくら夜鬼とは言え、ダメージが大きく、ふらつきながら傘で防ごうとするが

バキンと傘が壊れる音が響いた。ベクトル操作で拳の威力をそれくらいまでできる程の力を設定していたからだ。

彼女にもう防ぐ物はなく、まったくの無防備。

銀時は更に拳の力を調整する。

「いっから先は一方通行だ。俺とマジに殺り合いてエなら、足りねエ頭でもつと捻つてから出直しやがれ……」

「ゴツーーと顔面に鈍い音が届いた後、そのまま更に彼女の体は吹っ飛ぶ。

「つ……」

あまりの衝撃に言葉も出ず、神楽は倒れたまま意識を手放した。

「あー…………ひつとやり過ぎちゃったか？」

氣絶してこむ神樂を離れたとこから見つめてだるやつて云つた。

「戦闘種族だか何だか知らないけど、さすがにやりすぎなんじゃない？最後のアレは駄目でしょ」

銀時の隣に割つて入つてきた麦野に言われて、やつぱり？と田代伝えるとすぐに頷かれた。

「それにしても…………ひつから先は一方通行つて……へへつー洒落か何かなの？」

笑い堪えている麦野にしかめながら

「つぬせHよ。何か知らんが、そオいうのが頭に浮かんできただけだ」

今にも爆発しそうな麦野を無視し、ポカンとしているギャラリーを見て改めて悲惨な光景に苦笑した。

「わリイな、ニンなボロボロにしちまつて。責任持つて俺がちやつちやと修理すつからよオ」

「…………ああ」

申し訳なさそうな顔で謝る銀時に近藤はまだ呆然としながら頷くだけだった。

それを苦笑しながら神楽を彼らのほうに渡して作業を始めた銀時。

麦野もそれを手伝いながらからかう。

一人が楽しそうにも見える姿に何とも言えない顔を彼らはしていた。

5、暴れたなら止付けはきひとつ（後書き）

銀時／＼S神楽はひとまず終了です。

何かあれば何でもどうぞーーー！

6、天使?いいえ。ただの目立ったがりなメルヘン君です（前書き）

やつぱりいいとくんはいいキャラだと思します（笑）

6、天使？いいえ。ただの目立ったがりなメルヘン君です

垣根は網笠を深く被つた人物とともに、ある建物に辿り着いた。

まず見えたのはスナックお登勢と言いつ看板。

「ここなん所にスナックなんて店あんだな」

へえと少し興味を示していると男が話しかけてくる。

「上を見てみる」

くいっと男は顎で上げると垣根はそれを見る。

「万事屋銀ちゃん？」

スナックの2階にはでかでかとそう書かれている看板があった。

「やあ。そこが銀時の居場所だったところだ。銀時がいた証

男は段々と声を沈めながら、そう答えた。

「…………」

垣根は考へてはいるが、どう考えても嘘を言つているよつには見えない。

チツと苛立ちながら見つめる。そして垣根は

「この場所が銀時の全てがわかるつてえのか？」

本題に入ると男は頷く。

「ああ、そうだ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870w/>

とある侍の一方通行～江戸編～

2011年11月17日19時21分発行